

論文

近代盲人福祉の先覚者好本督

——『真英国』と『日英の盲人』を中心に——

森田 昭二

関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程後期課程

● 要約 ●

キリスト教的精神の遺産と伝統が最もよく培われているオックスフォードで、真の英国を学んだ好本督は、その隣人愛から、日本の盲人にイギリスの最もよく進んだ盲人福祉と盲教育を紹介して、その啓蒙と改良を図った。その最初は、1902年に出版した『真英国』である。しかし、この書は、多くの盲学校ではほとんど関心が示されなかったが、東京盲啞学校に学ぶ盲学生に新しい文化の光をもたらす書として受け入れられたのであった。その後、『真英国』を整理、増補した『日英の盲人』が1906年に点訳本とともに出され、全国の盲学校に配布された。折りしも障害児教育の改善の機運とともに、この書は、広く我が国の盲人界に受け入れられたのである。それとともに、次代の盲人福祉を担う先覚者となった中村京太郎や熊谷鉄太郎のような盲人たちを育てたのである。こうした意味で、好本督は我が国の近代盲人福祉の先達であった。

● Key words : 好本督, 盲人福祉, 『真英国』, 『日英の盲人』, 盲教育

人間福祉学研究, 2 (1) : 61-72, 2009

1. はじめに

好本督が我が国の盲人の前に姿を現す20世紀初頭は、デフレ経済の騰貴化の中で、昔ながらに三療や音曲で暮らしを立てていた盲人たちが、生活の窮乏を極め、晴眼者による鍼按の職業への進出もあって、これまでの盲人の職域が圧迫されるという事態に直面していた¹⁾。そうしたことから、盲人の権利擁護の動きも見られるが、しかし盲人への差別意識が根強く、また明治政府による「当道」の廃止以後、盲人の自立を助ける職業教育としての盲学校の設立は、慈善家によるものが大半ではあったが、急激にその数は増したものの、そこに通える盲人は一部の恵まれた者に限られていた。しかも教育内容から見ると、なお暗中模索

であった。そうしたところに新たな盲人福祉が求められてきたのであった。我が国では、明治30年代後半頃から盲人福祉に新展開が見られる事実を認めることができる。このことに触れて、岩橋(1980:94)は、「西欧文明の受け皿として、社会的に弱い人々のために働こうとしたのが、プロテスタントを中心としたキリスト教の流れを汲んだ人々であった。彼等は、市民社会的、自立自助で、社会から阻害された人々の問題を自主心、連帯愛、人類愛をもって対処しようとしたのである。この流れは、盲人関係で言えば、内村鑑三の思想的な影響を受けた好本督がその先達である。そこから熊谷鉄太郎、中村京太郎という人脈ができ、『東京光の家』の秋元梅吉、岩橋武夫へと連なる。これは、盲人福祉の流れである」と論じている。

本稿では、岩橋の指摘に沿って好本督を取り上げ、彼の果たした役割を論じたいと思う。我が国の盲人福祉の上に好本が登場してくるのは、1906年頃からその動きが活発となる盲教育の改善を目指す盲教育令の発布要求運動にすこし先んじる時期であった²⁾。人づくりにおいて優れているイギリス盲教育の紹介を中心に、我が国の盲人界に有益と思われる盲人福祉事業などを新しい文化の光として伝えることで、我が国の盲人界に啓蒙と改良をこころみようとしたのである。ただし、好本督は、これまで社会福祉史の上で取り上げられることはなかった。盲人界では、「日本盲人の父」とまで言われ、その功績に高い評価が与えられてきたのであるが、彼は、貿易商の仕事に主として従事し、福祉事業を直接に行った人ではないのである。玉田敬次は、好本(1981)の序文で、「日本点字図書館」館長の本間一夫が、好本について「日本盲人キリスト教伝道協議会の創設、『点字毎日』の設立、日本語点字聖書の出版に大きな役割を果たした。また、日本盲人の初期の指導者岩橋武夫、中村京太郎、熊谷鉄太郎、秋元梅吉、その他多くの人々を育成、援助の手を差し伸べた」(玉田1981:8)と述べたことを記している。こうした後に評価される業績について論じることは、近代盲人福祉の歴史の上で欠かすことのできない重要な項目であるが、彼の活動の出発点となった『真英国』の出版、それを徹底せんとした『日英の盲人』の刊行が果たした意義は重大である。しかしこれに関しては、これまで十分な検討がなされてきていない。好本の業績を明らかにしていくためにはこの点を揺るがせにはできないのである。

1902(明治35)年4月に、好本は『真英国』を出版し、それを我が国の各地の盲学校に送った。「日本盲教育界に一大旋風を巻き起こすような大事件が突発しました」と熊谷(1960:172)は、当時東京盲啞学校に在学していて、この本に初めて接した時の印象をこう回顧している。その一冊の書の中に収められた「英国の盲人」という一節があり、それこそが「日本盲界に黎明を告げる鐘の

音」と更に付け加えている。本稿では、この好本のイギリス盲人福祉の紹介を、啓蒙とその受容という面に分けて検討してみることにする。そうして、その歴史的な意義を明らかにしたいと考えている。あわせて好本のその生涯と思想的背景にも触れておきたい。

2. 好本督の生涯及び研究資料

好本督は、自分のことについては殆ど語ろうとはしない人であったようである。口下手で、非常に物静かな人であった。彼は、自伝に近いものを『十字架を盾として』(日曜世界社、1934)、『神に聴いて』(明和書院、1949)、『わが隣人とは誰か』(待晨堂、1967)という三冊の書にして残しているが、しかしそれらは、おおかたは信仰告白といった内容のものである。ただ、『十字架を盾として』に付された縁戚にあたる山県五十雄の著者紹介に書かれている彼の前半生の略歴と、『神に聴いて』の「あとがき」で、同じく山県五十雄がその後のことにもすこし触れているのが、彼を知る唯一の資料といってよい。彼の略年譜は、『主はわが光』に付された今駒泰成の作成になるもののがもっとも詳しい。他にみられるものは、全てこの略年譜を参考にしたものである。なお付け加えておくと、最近、彼が早稲田大学講師となったことに関して、その記録とともに詳細に記述された論文が出た³⁾。

さしあたり、好本督の生涯を瞥見しておこう。好本は、1878(明治11)年1月23日、大阪市東区瓦町1丁目に生まれた。父忠璋は、陸軍軍医中佐であったが、督の生まれた頃には軍務をすでに退いていたらしい。外科医として開業していた。かなり流行っていて、家は相当に裕福だったらしい。長男として生まれた督は、生まれつき弱視であった。府立一中を卒業後、東京高商(現一橋大学)に進んだ。上京当時の督について、遠縁で、彼を家に下宿させた山県五十雄は、育ちのよいお坊ちゃんだったと言っている。彼が変わったのは、内村鑑三を知ってからである。東京高商を卒業の

後、渡英し、オックスフォード大学に入学した。

1902（明治35）年、24歳のとき帰国して、『真英国』を著し、各盲学校に送る。一度彼は、オックスフォードに戻り、ふたたび帰朝した1906年に、早稲田大学の英語講師になる。また「日本盲人会」を結成した。この年、さきに出版した『真英国』の中から「英国の盲人」の部分を整理、増補した『日英の盲人』を出版し、全国の盲学校に点訳本とともに送った。

その後、再び渡英し、マーガレットと結婚。商事会社「オックスフォード・ハウス」を設立した。これで得た利益は、日本盲人のために使ったという。1912年頃、毎日新聞の河野三通士に点字新聞の発行を提唱。この年、中村京太郎の英国留学を援助。その翌年には熊谷鉄太郎の関西学院への入学を援助した。

好本は1914年36歳の時、「オックスフォード・ハウス」倒産の危機に直面した。これは神戸の会社を任せていた支配人が、大量の負債を残して逃亡したことによっている。そのため彼は苦境に立たされる。この時、彼のしたことは、人を恨まず、神にひたすら祈ることであった。この頃、視力が少々弱くなってきたことを意識するようになっている。「オックスフォード・ハウス」は、その後信頼を回復し、有力な羅紗会社の援助を受けたりして存続することができた。そして1919年、「盲人キリスト信仰会」の結成に尽くす。また、好本の援助により、秋元梅吉や伊藤福七の苦心の結果、『点字旧約聖書』が完成する。53歳のとき、『祖国に寄す——英国の魂』を出版し、これを盲学校や関係方面に配布した。1934年、自伝的な内容の『十字架を盾として』を出版する。これは、好本自身の手になったというよりは、遠縁の山県五十雄が編集したものである。また、中国の盲人に標準中国語点訳本によるバンヤン著『天路歷程』数百部を贈ったりもしている。

第二次大戦後の活動として、1948（昭和23）年に、『英国人とキリスト教』を、1949年には、自伝『神に聴いて』を出版する。なお、「日本盲人キリ

スト教伝道協議会」の初代議長となり、「第一回アジア盲人福祉会議」に出席したりもしている。さらに、第一回「点字毎日文化賞」を受賞した。1967年に、自伝としては三冊目となる『わが隣人とは誰か』を出版したが、1973（昭和48）年4月14日逝去する。享年94歳であった。

好本督は、この様に日本の盲人に、さらにはアジアの盲人に献身した生涯を送った。特に、盲人の生きる力の支えとしてのキリスト教の伝道、聖書の点訳、そしてそれが容易に手に入るようにさまざまな援助を行った人であった。

因みに、好本には、二宮尊徳の『報徳記』（宮内省、1883）の英訳など、ほかにまた、オックスフォード・ムーブメントの我が国への紹介として、セシル・ローズの『神に聴く時』（日曜世界社、1938）などの訳書がある。

次に好本が、社会福祉史、盲人史にどう取り扱われていたかを簡単に見ておくと、まず、社会福祉史で彼は取り上げられることはない。それは、彼が、社会事業の実践家でもなければ、思想家でもなく、運動を組織した人でもないと思われるからである。障害者の歴史や、盲人のみを扱った歴史の書においても、盲教育史を論じた中野善達・加藤康昭『わが国特殊教育の成立』（東峰書房、1967）や、盲人の生活史を記述した生瀬克己補章「近現代の〈視覚障害者〉をめぐって」『盲人の生活』（雄山閣、1997：221-243）にも、また、盲人の文化史や運動史などを論じた山田明「日本における障害者福祉の歴史」『講座障害者の福祉1 障害者の福祉と人権』（光生館、1987：44-128）などにもその名を見ることはない。盲人全体のことを網羅して完成された「世界盲人百科事典」編集委員会『世界盲人百科事典』（日本ライトハウス、1972）や、キリスト教伝道から見た盲人史としての石松量蔵『盲人とキリスト教の歩み——盲人伝道百年史』（日本盲人キリスト教伝道協議会、1959）、チャレンジャーとしての盲人の歴史を書いた谷合侑『盲人の歴史』（明石書店、1996）などになって、「日本盲人の父」としてのその名が登場

してくるのである。そして好本の名は、鈴木力二『中村京太郎伝』（「中村京太郎伝」刊行會，1969）や玉田敬次『盲先覚者伝記シリーズ3 熊谷鉄太郎——見果てぬ夢——』（日本盲人福祉研究会，1985），関宏之『盲先覚者伝記シリーズ1 岩橋武夫——義務ゆえの道行——』（日本盲人福祉研究会，1983），岩島公『盲先覚者伝記シリーズ2 秋元梅吉——キリストの証そのものの人』（視覚障害者支援センター，1985）などの偉大な盲人指導者たちを取り上げた伝記や、熊谷（1960）や本間一夫『指と耳で読む』（岩波書店，1980）などの自伝になってその比重が増していくことになる。

この好本に関する研究としての先行文献には、好本督の最終の自伝である『わが隣人とは誰か』とともに、『主はわが光』に解説として収めた今駒泰成が書いている「日本盲人の父好本督の信仰と生涯」がある。以後、好本に触れた文章は、どれもみなこの今駒の論述を受け継いでいるに過ぎない。なお、この論考は、好本の活動にそって論じられているのであるが、その初期にあたるイギリス盲人福祉の紹介については、やや資料不足で、十分なものとはなっていない。ほかに、すこし詳しいものに阿佐博「日本盲人の父と呼ばれる好本督」『道一筋——昭和を生きた盲人たち』（あずさ書店，1993）がある。

3. 好本督のイギリス盲人福祉の紹介

好本督は、3回にわたって我が国にイギリス盲人福祉の紹介を試みている。第一回は、1902（明治35）年に出した『真英国』で、言文社より刊行された。二回目は、『日英の盲人』を1906年に東西社より、三回目は、1931年に財団法人中央教化団体連合会より出した『祖国に寄す——イギリスの魂』が、それである。最初の『真英国』は、出版されるやすぐに全国各地の盲学校に配布された。二回目に出された『日英の盲人』は、点字のものも同時に出された。その内容は、初めの『真英国』の中から盲人福祉に関する記事だけを抜き

出して、10項目に整理し、まとめられたものである。ただし、初めのものにいくらか増補された部分が加わっている。三回目の『祖国に寄す——イギリスの魂』は、イギリスの紹介の中に盲人福祉も含むという最初の内容に戻って書かれているが、『真英国』にくらべて、時代が進んだ分だけ内容が進展しており、より英国の精神文化に力を入れて書かれているために、分量は大幅に増えている。

ここで論を進めていく前にひとつ断っておかなければならないことがある。それは、大変重要なことであるが、先行文献である今駒の文章は、『真英国』を見ないで、『日英の盲人』から内容を類推して書かれているということである。このことは、今駒自身も断っているもので、間違いはない。後で述べることになるが、好本が二冊の本に託した意図を正しく理解する上でこのことは見落とせない事実なのである。

さて、いま『真英国』は、原本が一つだけ京都大学図書館に残っているのが確認できる。本は、四六判で、153ページのものである。これを見ると、『日英の盲人』の方が、いくらか増補された部分を加えて書かれていることがわかる。ここでは、この三回にわたるイギリス盲人福祉の紹介のうち、『真英国』と『日英の盲人』の二冊を取り上げ、それらを検討して、好本の活動のうちでその出発点ともいえるこの二冊の本の出版の意図を解明したい。

3.1. 『真英国』

論を進めていく手始めに、まず好本督が『真英国』に触れた言説を見てみよう。彼がその最晩年（1967）に著したその自伝『わが隣人とは誰か』の「第8章 オックスフォードの日々」にそれを見ることができる。

「英国に來た最初、身体障害者の福祉や、大学の貧民街セツルメントを見」（好本 1981：140）たり、聖書教会の活動を見て、「私は、こういうことが、私の祖国でもできたらと願わずにはおれな

かった」(好本 1981:140)と、彼は当時を振り返っている。それにつづけて、キリスト教の遺産、伝統が最も豊かに培われたオックスフォードに来て、キリスト教の遺産を体現しているような優れた教授たちに親しく出会い、彼等を通して真の英国を知ったことを言い、「その結果『真の英国』と題する小さな本を書くことになった。そして、この本により、文部省は日本の盲人教育の徹底的改革に着手することになったのである。このことは私の働きに大きな励ましとなった」(好本 1981:141)と、書き記している。ここで述べられている好本の記憶によって、『真英国』が我が国の盲教育制度の改革に貢献したことを知ることができる。恐らくそれは、1923(大正12)年に出された「盲学校及聾啞学校令」のことを指しているのであろうが、しかし、この彼の記憶は、『日英の盲人』を含めて言っているのであって、この点については後に検討するとして、この書が与えた影響は、東京盲啞学校に当時学んでいた盲学生たちに大きな刺激を与え、盲人福祉に指導者となっていった人材を育成することに力があつたことを第一に挙げなければならない。

3.1.1. 『真英国』の内容

この本は、「自序」で好本自身が「この小著作は、余が英国に滞在中、見聞した事々のうち、今日の我が国に紹介して、有益であらうと信じたことを、ありのままに少しばかり書きたてたものである。もしこの小著によつて、英国に於ける無形の文明の千分の一なりとも、我が国に移し植ゑることができるならば、余の望みは足りるのである」(好本 1902:11)と記すように、英国での見聞録であり、英国の優れた文明の紹介を通して、我が国にその啓蒙を図ろうとしたことは明白であるが、この書は、単なる見聞録でないことは、内村鑑三の序文や「イントロダクション(緒言)」の山県五十雄のことばからも充分うかがい知ることができる。内村は、「大国家は大人物の如し、即ち貧者を顧る者なり、痴者を教へ、盲人を導くものなり、英国の

大なるも茲にあり、その四百余艘の軍艦にあらず」と言い、「今や皮相的英国を日本国に紹介する者千百を以て算へらるるに方りて親友好本督君は博愛的英国を吾人に伝へらる」(内村 1902:2)と、本の内容を紹介している。また山県(1902)は、内村が好本に、君はあちらで何を見て一番感じたかということを尋ねたときに、彼が人ですと答えたことを挙げて、「ああ、好本君の洋行も無駄でなかつたと心の中に思つたことがある。毎年我が国から洋行する人は沢山あるが、好本君のやうに人を見て感じてきた人が果たして幾人あるだらうか」と、感服したことを述べ、そうして、この本において精神的文明が如何に偉大なるかを伝えようとする好本の言に傾聴すべきことを言っている。

好本の最大の理解者であつた山県は、盲人に関する部分に触れて、「君はまた不幸にして眼が甚だ悪い、夜間はほとんど盲人同様である程に視力が弱いのである。それで君は最も盲人に対する同情に富んで居らる。どうか我国の盲人の為に尽くしてやりたいといふが年来の志望で、彼地に居らるる中は絶えず盲人教育の事に意を注いで居られた。有名なる盲人博士カムベル氏には度々面会して其意見を問ひ、折りさへあれば、種々の盲人学校を參觀して大に研究を積まれた。此本のうちに詳しい盲人教育談の出で居るのは其結果で、我国の盲人に取りてはこれ程のよい土産は無いと思ふ」(山県 1902:7)と、述べている。

さて、具体的な内容の検討に入らなければならないのであるが、それに先立って、好本督が紹介した1900年前後のイギリス盲人福祉の歴史について、岩橋武夫の解説を借りて略記しておく⁴⁾。

アーミテージは、英国盲教育の不振と社会における盲人の地位、職業の劣悪なるを慨嘆し、一大革命の必要を提唱し、それに着手した。1872年、ロンドンに盲人師範専門学校を興し、カムベルを推挙して校長とした。1895年には、盲人教師の師範部も設置、教育面の充実を図った。また、この期間に盲人のために計画された一般の社会事業と

しては、1868年に開始された「英国内外盲人協会」(The British and Foreign Blind Association)がある。これは、盲人に図書を供給する事業であった。このほかにも、1879年にガードナーによって創設された「ガードナー盲人組合」があって、盲人の教育、職業の訓練に物質的な援助をした。こうした機運の中で、1883年に、盲啞に関する王命委員会が設置され、6年後には報告書が出され、それにより1893年に議会は盲啞義務教育令を可決、この法令によって盲学齢児童は国家の指定する小学教育を晴眼児童と同様に受けることになった。こうした改革は見たが、しかし、英国においても本格的な盲教育の充実が見られるのは、1920年の立法を俟たなければならなかったと岩橋は言う。ここで『真英国』に戻って検討に入りたい。この書には、「英国の華」と題する章に、「英国の盲人」という一節がある。そこで述べられているのは、まず「盲人に関する概況、それにつづくイギリス盲人福祉の具体的な紹介とそれを通しての我が国の盲人界への提言である。

イギリスの具体的な盲人福祉の例として、まず職業が取り上げられ、鍼按や音曲以外にほとんどその道を断たれている我が国の盲人に比して、学術の方面(牧師・教師など)、工芸の方面(箆・刷毛などを作ること)などに幅広く進出していることが紹介されている。つづいて盲人改良会としての「内外盲人協会」が、盲人の教育と職業を進め、かつ一般の状態を改良することに成果を上げていることを述べ、その点訳事業の優れている点を紹介している。また、「ガードナー盲人組合」や「貧盲救助会」なども挙げている。そうして、これらの改良会が、盲人の手で組織され、運営されていることを指摘している点は注目される。さて、好本がもっとも力を入れて紹介しているのは、盲人に高等教育への道を開いている盲人学校のことである。例えば「盲人高等師範学校及び音楽学校」や、熊谷鉄太郎にそのカリキュラムで感激させた「ウースター高等盲人学校」が挙げられている。人物としては、まず第一に「盲人高等師範学校及

び音楽学校」の創設者であるカムベル博士が挙げられ、そのほかアルフレッド・ハーストやレンジャー、マリア・ギルバートなどの著名な盲人の名が見える。

つづけて、筆を「我が国盲人界の改良」へと進めていく。「されば二十世紀の吾人は、盲人を按摩師としての外には能なき者のやうに見做したりする古めかしい間違つた思想を捨てて、盲人を成るべく普通の人々と同様に取扱ふは勿論、これに充分の教育を授けねばならぬ」(好本 1902: 58)と言う。そこで、どのように改良していくべきかについて彼はいくつかの提言をしている。

まず第一に、盲児に義務教育を施すことが国家の急務であるということ。それには、各府県に一つずつ盲学校を設立することは、現状としては難しいので、学齢の児童を普通の小学校で普通の児童と一緒に教育すればよいと言う。職業教育については、鍼按、音曲の方面で優れた指導がなされていることを、好本は認めているが、これからの盲人にもっとも必要とされる高等教育については、我が国の現状において現実的なやり方として、東京か京都の盲啞学校に高等科を設けるようにすればよい。高等教育のための予備教育の教科科目は中学程度とすれば宜しかろうと提言している。それに併せて海外留学にも言い及んでいる。その留学先としては、人物の養成に重きをおく英国の学校を薦めたいと言っている。最後に、わが盲人諸君に望むとして、盲人は、その才能において、その実力において世人に劣っていないのみでなく、盲人界を改良する上においては、世人に勝っている。しかし、我が国の現状は、こうした人物に乏しい。その原因は、世人が盲人の実力を誤解していることにもよるが、盲人自身が自分の才能と実力とを信ずることが薄いことと、独立自尊の気概を欠いていることであると戒めている。以上がその内容の摘要である。

3.1.2. 『真英国』に認められるその姿勢とそれを支える精神的背景

これらを通して一貫して見られる好本の姿勢は、日本の盲人界の改良に役立つであろうイギリスの盲人教育や盲人福祉を的確に紹介しようとするものである。この姿勢を根底から支えるものとして「主はわが光」(詩篇 27・1)のオックスフォード精神による神と隣人への愛を特記する必要がある。好本にとって隣人とは、自分も弱視という同じ身の上である我が国の盲人にはかならなかつたのである。そのために彼のイギリス盲人福祉や盲人教育への関心の持ち方や取材の徹底、見聞の広さ、公正な判断は、盲人当事者の立場から出ている。また、その姿勢は、イギリス盲人教育や盲人福祉を我が国に取り入れようとするときにも、ただ盲目的にそれを行えというのではなく、我が国の現状なり、特質なりをしっかりと考慮に入れて発言する点にも認めることができるし、盲人への愛が見られる。例えば、盲人高等師範を訪ねて、体操の時間を参観したとき、ボートの競漕などに替わって、我が国であれば、柔道や相撲などが適しているかもしれないと考えたり、軍備や監獄の拡張に腐心する我が国の現状では、教育の設備拡充などとても手が回らないであろうことを踏まえて提言したりするところによく出ている。彼の一貫した姿勢は、隣人である我が国の盲人に勇気と光明を与えようとするもので、決して扇動者的なものではなかつた。しかし、我が国の現状にたいする彼の認識は、内村鑑三らに通ずる鋭い批判的なものも含んでいた。

3.2. 『日英の盲人』

1902(明治35)年に『真英国』を出して、全国の盲学校に配布した後、好本は英国のオックスフォードへ一度引き返している。1906(明治39)年ふたたび帰朝した彼は、早稲田大学へ英語講師として奉職することとなり、先述したように『真英国』の中から、「英国の盲人」の項を抽出して『日英の盲人』と題する小冊子を刊行した。あわ

せて左近允孝之進の「六光社」から点訳本も作成し、それらを全国の盲学校に配布した。秋葉馬治『東京盲学校六十年史』(東京盲学校, 1935)に、明治39年7月18日の日付で「好本督著『日英の盲人』出づ」の記事が見える。秋葉は、それにつづけて好本の略歴をかなり詳しく記しているが、『真英国』が『日英の盲人』の後に出版されたものとする過ちを犯している。

3.2.1. 『日英の盲人』の内容

『日英の盲人』は、50ページ足らずの小冊子である。山県五十雄の「序」があつて、「親友好本督君は、早くより我が国の盲人教育に注意され、親しく、イギリスに留学された間に、同国に於ける盲人教育の状況に就いて深く、博く調査研究された。今回その調査研究の結果の一部を、我が国に於ける盲人教育の進歩に資せんとする志をもつてこの冊子に発表された」(山県 1906:2)という刊行の趣意を述べている。前著の『真英国』の刊行趣意にくらべれば、我が国の盲教育に資せんとする調査研究の性格が強調されていることに気がつく。

内容は、その「目次」を挙げれば、『真英国』との相違が一目瞭然であろう。それは、「①英国の重なる盲人学校 ②英国の重なる盲人会 ③英国盲人の職業 ④現存の著名なる英国の盲人 ⑤盲人の能力が常人に劣らぬ理由 ⑥我が国盲人界の改良 ⑦われ盲人諸君に望む ⑧我が国の婦人に望む ⑨英国の盲人により我が国の盲人へ寄贈の書籍 ⑩盲児の父兄に一言す」の10項目から成っている。これらのうち、『真英国』に殆ど述べられていなかった部分は、「⑧・⑨・⑩」で、後で補われた論述である。さらに補った部分を拾ってみると、「②」に、「盲人家庭教育会」と「国民盲人用図書貸出館」の二つを挙げることができる。この二つに関しては、特に好本は重要な事項として付け加えたのである。これらの増補に関しては、その間の事情を示す資料として、1904(明治37)年に、英国より東京盲啞学校の同窓会誌『六星の光』

に寄せた好本の「盲人の読書機関」という一文は興味深い⁵⁾。

3.2.2. 『真英国』と『日英の盲人』の刊行趣意の相違

『六星の光』第6号(1904・1・28)では、「盲人教育及び盲人状態改良に就いて何か書いてみたいものであるとの余の宿望は、残念ながら未だ果たすことができない。それには、いそがわしい(ママ)という申し訳もあるが、一つには、余の取調べがなお不十分であるということである。ここには余の狭き見聞の一部を記し、かつは我が国の教育家または博愛家のご尽力を仰ぎたいと思う」(好本 1904: 35)(原文は点字)と、好本は書いている。この文から察するに、我が国の盲人に、イギリスの進んだ盲教育や盲人福祉を紹介し、遅れたその現状をすこしでも改良しようとする好本の基本姿勢には変わりがないが、調査研究を徹底して、我が国の教育家や博愛家に一層役立つものを書きたいとする彼の熱望は、『真英国』に対する世情の冷淡さや、一部の盲人たちの熱烈な期待が、彼のうちになんらかの影響を与えていたことを示しているように思う。その意味で『真英国』と『日英の盲人』には、微妙な姿勢の違いが見られるのである。なお、この号では、「国民盲人用図書貸出館」のことが詳しく書かれている。これに次いで第7号(1904・2・28)では「つづき」として他の盲人図書館の紹介をし、点字図書の作成には、婦人の力が偉大であることを説いて、我が国の婦人に点字図書の作成に協力するよう呼びかけている。

『日英の盲人』が出た1906(明治39)年の『六星の光』で、熊谷鉄太郎は、「多忙なる将来」(第40号, 1906・12・28)の一説に「英国盲人について、詳しく知らんと欲する者は、好本先生の著、日英の盲人を見るべし」(大塚 2007 より再引用)と書いているが、『日英の盲人』が出て一般に知られるようになり、『真英国』は盲教育界ではあまり顧みられなくなっていったその後の事情を暗示し

ている。

3.3. 好本督のその他の啓蒙活動

好本督のその他の啓蒙活動として、この時期のものをいくつか挙げておきたい。『真英国』が各盲学校に送られた1902年の京都市立盲啞院の『寄附金申込書綴』を見ると、「明治三十五年七月四日 英国ノルウド盲人師範学校生徒製作手工品・一個 亜米利加州地図・壹軸 日本支那地図・貳枚 英国点字書・三冊 英国盲人雑誌・四冊 支那ニ於ケル盲人用記号文字(英書)・壹冊」が好本督の寄贈として記録されている⁶⁾。彼は、『真英国』を送ただけではなく、これらの品も寄贈しているという点を見逃してはならない。

次に挙げなければならないのは、「日本盲人会」の設立である。好本は、早稲田大学の英語講師となった1906年頃から念願の盲人界の改良の実践として、同志を集めて「日本盲人会」を結成している。発起人として、山県五十雄(朝鮮ソウルプレス英字新聞主筆)、小西信八(東京盲啞学校校長)、鳥居嘉三郎(京都市立盲啞院院長)、森巻耳(岐阜訓盲院院長)、左近允孝之進(兵庫訓盲院院長)、さらに石川倉次(日本訓盲点字翻案者)などといった人たちが名を列ねていた。この会は、好本の著書『日英の盲人』やヘレン・ケラーの『わが生涯』、内村鑑三『後世の最大遺物』などを点字出版し、広くキリスト教感化を目指した。しかし、その活動は、資金面から長続きしなかったようである。杉野(1999: 6)にも、この「日本盲人会」を通して、按摩專業運動の初めに好本の名が見えるが、このことについては、資料の渉猟が行き届いていないので、今後の課題として残したい。

好本が、東京盲啞学校の同窓会誌『六星の光』に寄稿したことは前にも述べたが、1911(明治44)年10月28日付『六星の光』第96号には「10月7日本校における好本督先生の講演」の記事が載っている。これは、『東京盲学校六十年史』によると、蓄音機をもって欧米の音楽を生徒に聴かせた後、英国より帰朝した好本督を招いて、欧米における

盲人教育の講習会を開いたこと、夜には、キャンベルの盲人師範学校の実況を幻灯でもって紹介されたりしたことが分かる。『日英の盲人』を出し、先進国である英国盲教育界の紹介者として彼が既に認められてきていることをこの記事は物語っていると言ってよい。

4. 好本督によるイギリス盲人福祉の紹介の意義と受容の種々相

以上で好本督の最も初期にあたる、イギリス盲人福祉の紹介を通して我が国の盲人界を啓蒙し改良することを目指した活動を見てきたのであるが、ここでは、その活動に対して盲人界や盲教育に携わる人々がどのような反応を示し、彼が移し植えんとした思想や施策、事業をどのように受容し展開していったかを略述しておきたい。そうして、彼のイギリス盲人福祉の紹介の意義について考察を進めていきたい。

東京盲啞学校を卒業し、私立横浜キリスト教訓盲院の教師となった熊谷鉄太郎は、『六星の光』第40号(1906年12月28日)に「多忙なる将来」という一文を投じている。その中で、彼は、盲人の将来にとっていま最も努むべき仕事は、「盲人界風儀の改良、盲人団体の組織、盲人の中等および高等教育同じく幼稚園、貧盲の救助、小僧按摩をその残酷なる師匠の手より救い出だしてこれを教育すべき道、読書機関の準備、旧職業保全およびその改良、新職業の発見等、吾人の前途にいろいろの山をなして」(大塚2007による)と述べている。これは、1905(明治38)年2月19日、第21回帝国議会において鍼按摩を盲人の専業とすることを趣旨とする「盲人保護に関する建議案」が提出された当時、『六星の光』でも盲人保護に関する議論がいくつか寄せられているのに対して熊谷が、欧米の盲人と対比させ日本の盲人の生活の様子を述べ、盲人教育の必要性を説いた上で日頃彼が懸案としている盲人問題を主張したものである。この彼の主張は、上に見てきた好本督の考え

にはほぼ合致するものであると言ってよいであろう。別なことばで言い換えれば、①キリスト教による自律、②高等教育へ向けての人材育成、③点字図書の充実、④教育制度の整備と盲児の完全義務教育制の実施、⑤盲人団体の組織化、⑥新職業の開拓という、欧米の盲人教育や盲人福祉の知識によってもたらされた我が国盲人界の問題である。因みに『真英国』や『日英の盲人』が、それらの問題にどのような影響を及ぼし、それらが以後どのような展開を見せたか検証してみるに、特に②と④に刮目すべきものを見るのである。

「一冊の教科書さえ点字で出版されたものがない、生徒たちはみな先生に読んでもらって、点字でこつこつと一点ずつ、つきながら教科書を写しとるか、それとも誰かの写したのを借りてこれを復写するよりほかに道がないのです」と熊谷(1960:173)で言っているのが、当時唯一の官立であった東京盲啞学校に学んでいた全国選りすぐりの盲生徒の現状であった。教科書すら持ち得ない有様の盲生徒たちが、『真英国』に紹介されている進んだ英国の盲人教育に触れて、一番に反応を示したのは言うまでもない。

熊谷の『薄明の記憶』によると、五月半ばの或る日曜日の午後、盲部の同窓会の席上で盲部の主任教師であり、同窓会の会長でもあった石川重幸が一時間をかけて『真英国』の中の「英国の盲人」を読み聞かせてくれた。その時の一同の驚愕と感激、さらにはその世界への憧憬は、既に「まえがき」でも述べた通りである。

この『真英国』を最もよく理解し、好本督への接近を試みた者に中村京太郎と熊谷鉄太郎の二人が考えられる。ただ、当時中村は正則英語学校に通っていて、盲人で唯一英語のできる人物であった。このことが中村の英国留学生第1号に繋がるのである。さて、中村の英国留学が実現し、いよいよ神戸港から英国へ向けて出帆という時に、当時兵庫訓盲院に移ってきていた熊谷は、中村を見送った時、今度は好本先生の援助を受けて自分が留学する番だと思ったと『薄明の記憶』に記して

いる。彼は、その直後好本の世話で関西学院専門学校⁶の聴講生として入学したのであった。

時代はすこし後になるが、英国留学から帰国した中村京太郎は、しばらく全国各地に講演をして回ったが、なかなか受け入れられなかった。同愛訓盲院に勤めるようになって、平方竜男を誘い、共同生活を始めると、鳥居篤治郎や秋元梅吉などの若い仲間たちが出入りするようになり、そこで持ち上がったのが、自分たちの手で理想的な盲学校を作ろうという話である。彼等は、早速「私立日本盲学校設立趣意書」のチラシを作成した⁷。

そこで、「常人との差異を指摘して恐るべきは宿命観に陥らしむる等その弊少なからず」と言っていて、晴眼者の行う盲人教育を批判し、盲人教育は盲人の手でということを主張したのである。そうして、「①幼年盲人の教育 ②職業教育の発展完成 ③確乎たる精神教育」の3点を掲げた。この趣意書は、1919（大正8）年2月の日付で、発起人に中村京太郎・平方竜男・秋元梅吉・鳥居篤治郎の4名が書かれている。

この計画は、資金面でうまくいかず、実行に移す前に挫折してしまったのであるが、ここに見る夢に向かって戦おうとする人たちに血潮漲る青春群像の息吹が感じられる。そしてそのような彼等の背後には、「先生」格で好本督の姿が浮かんでくる。

1923（大正12）年に出た「盲学校及聾啞学校令」は、各府県に盲学校と聾啞学校を必ず1校ずつ設置するようにと決められたりした、わが国の盲聾教育史上かなり画期的な法令であるが、1906年に文部大臣に建議書を東京盲聾学校校長小西信八、京都市立盲聾院院長鳥居嘉三郎、大阪盲聾院院長古河太四郎の三名が連署して提出して以来、発布までかなりの長年月がかかったのであった。なぜこのように長くかかったのか。『点字大阪毎日』第35号（1923年1月4日）で中村京太郎は、現場教師の怠慢で、結果的には文部省の主導でこの法令が出来上がったことを言っている。それはさておき、この法令に好本督の『真英国』や『日英の

盲人』がどのように関わったのかは具体的に検証することは難しいが、なんらかのかたちでこれに寄与したことはあり得ることである。三名の連署で文部大臣に出されたこの建議書以後、新しい盲聾教育令を求める動きが活発となり、展開されていった。建議書は、三名によって成文化されたが、それは、「①学校編成 ②学科程度 ③校舎及び教具 ④職員資格 ⑤盲人保護法案その他教育上に関する件」の4項目より成るものであった。また、1911年には、「盲聾ソノ他特殊児童教育取調委員会」が出来て、「本俸及び欧米諸国ニ於ケル盲聾ソノ他ノ特殊児童教育ニ関シ調査スルコト」という調査項目が付されていることを思うと、その過程で、『日英の盲人』が参考となったのは認めてよいであろう。

こうして好本督の活動のうち最も初期にあたる『真英国』と『日英の盲人』の出版を通して行ったイギリス盲人福祉の紹介を、啓蒙と受容の面に分けて見てきたのであるが、ここでその紹介のもつ意義についてまとめておきたい。盲人を育てる教育を中心に、さまざまな制度や施設、事業などの充実した環境の中で、盲人が晴眼者と肩を並べて生きていく社会が実現しているイギリス盲人福祉の紹介は、我が国の盲人界に夜明けを告げる鐘の音のように響いてきたのであった。細かいことは措くとして、その意義を二つにまとめたいと思う。まず一つは、我が国の盲学生に高等教育（海外留学を含む）への道を拓き、盲人界の改良に役立つ、広い見識をもった人物を育成していくことに力があつたことである。もう一つは、我が国の盲教育制度の改革に役立ったこと。特に、前者の意義は、特筆されてよい。さらに付け加えて言うならば、市場経済の原理が支配する現代にあって、障害者の自立はますます困難となってきた。いまこそ好本の生き方やその活動は見直されてよいのではなかろうか。

5. まとめ

『真英国』の出版された1902年は、序文で内村鑑三が言うように「日英同盟」が結ばれた年であった。しかし日露戦争を挟んで、我が国は急激な軍事大国化へと突き進んでいくのである。そのために、地方の農漁村は疲弊し、都市部貧困層はさらに増大し深刻化の様相を一層深めてきていたのが当時の現状である。無論障害者も困窮の底に喘ぐ有様であった。これらの人への救済は、篤志家の慈善に任せられることが多かったが、しかしこの頃から組織化の動きが見え始めた時期と言っていであろう。我が国では、すでに片山潜が、三ヶ月のイギリス旅行の成果として「琴具須玲館」というセツルメント事業を1897(明治30)年に始めているのではあるが、実際に好本督も、セツルメント事業としての「トインビーホール」などの見聞を通して社会福祉の精神を体得して帰国したのであった。彼は、オックスフォード精神としての「主はわが光」による隣人愛を最上のものとして、隣人である日本の盲人に『真英国』や『日英の盲人』を贈ったのである。このことは、言うならば我が国の盲人界への一種の種蒔きであった。この意味で、好本督は、わが国の近代盲人福祉の歴史において源流となり得ている。

注

- 1) 本稿では「盲人」という表記を用いている。福祉行政における呼称は1949年の身体障害者福祉法を境として「盲人」から「視覚障害者」へと切り替わるが、ここでは明治・大正期を扱うことから「盲人」の呼称を採用した。同じ理由で、「盲哑」も使用した。
- 2) 丸川(1929)や大河原(1938)、加藤(1994)などに、その展開が述べられている。この運動の成果としての「盲学校及聾哑学校令」の制定に至るまでの経緯については平田(1989)が詳しい。
- 3) 安在邦夫(1990)「本学初期の視覚障害教員好本督」障害学生問題研究会編『総合大学における障害学生のあり方の基礎研究』多賀出版、275-283。
- 4) 1929年の2月から12月にかけて岩橋武夫は、「英

国に於ける盲人社会立法」を『社会事業研究』に連載し、英国留学の成果を発表した。青柳まゆみ・中村満紀男(2001)「19世紀末イギリスにおける視覚障害者の生活実態と社会の期待——1889年盲聾等王命委員会公聴会証言を中心に」『心身障害学研究』25、89-99は、19世紀末の視覚障害者の生活実態と社会の期待との関係を盲聾等王命委員会の公聴会議事録を使って分析したものであるが、これによると、好本のイギリス盲人福祉の紹介が、我が国に移し植えるに有益なものと考えられることに眼を向けていたことが、逆に偲ばれる。

- 5) 点字雑誌『六星の光』は、東京盲哑学校の同窓会誌である。現在筑波大学付属視覚特別支援学校の資料室に所蔵されていて、その総目次が津曲裕次監修『障害者教育福祉リハビリテーション目次総覧』(大空社、1990)によって引けるようになっている。明治での好本督の論説は、それによると2件である。大塚(2007)に詳しい記述がある。
- 6) この書類は、現在も京都府立盲学校の資料室に所蔵されている。この年の寄付者には、佐伯理一郎や奥村三策などの名が見える。なお、『明治三十五年四月 当直日誌 盲哑院』の7月4日の項には、「好本督氏来院」の記録があり、寄贈のことが記されている。
- 7) その時のチラシの一枚が、京都府立盲学校の資料室に、『本院ニ関ル盲哑教育書類』という文書の中に収められて、保存されている。

参考文献

- 平田勝政(1989)「大正デモクラシーと盲哑教育——『盲学校及聾哑学校令』の成立過程の分析を通して——」『長崎大学教育学部教育科学研究報告』37。
- 岩橋英行(1980)『青い鳥のうた——ヘレン・ケラーと日本』日本放送協会。
- 加藤康昭(1994)「日本の障害児教育成立史に関する研究——成立期の盲聾哑者問題をめぐる教育と政策——」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』43。
- 熊谷鉄太郎(1960)『薄明の記憶』平凡社。
- 丸川仁夫(1929)『日本盲哑教育史』京都市立盲学校・京都市立聾哑学校同窓会。
- 大河原欽吾(1938)『盲教育概論』培風館。
- 大塚美紀(2007)「資料紹介/点字雑誌『六星の光』掲載論稿〔墨字訳〕——刊行初期における盲人の職業問題に関する論稿を中心に——」『東京社会福

社史研究』.
杉野昭博 (1999) 「『盲人保護法案』に関する帝国議会議
資料 (1905 から 1914) —— 視覚障害者による『按摩
専業運動』——」『調査と資料』 91.
玉田敬次 (1981) 「序文」好本督『主はわが光』日本キ
リスト教団出版局.
内村鑑三 (1902) 「序文」好本督『真英国』言文社.
山県五十雄 (1902) 「イントロダクション (緒言)」好

本督『真英国』言文社.
山県五十雄 (1906) 「序」好本督『日英の盲人』東西社.
好本督 (1902) 『真英国』言文社.
好本督 (1904) 「盲人の読書機関」『六星の光』第 6 号.
好本督 (1906) 『日英の盲人』東西社.
好本督 (1981) 『主はわが光』日本キリスト教団出版
局.

Tadasu Yoshimoto, a Pioneer of Modern Services for the Blind

——Focus on *Shin Eikoku* and *Nichieino Moujin*——

Shoji Morita

Doctoral Program, Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

With a deep appreciation of the Christian spiritual teachings cultivated at Oxford, and neighborly love inspired Tadasu Yoshimoto to write his first book, *Shin Eikoku*, in 1902I, designed to promote in Japan the most advanced services and education found in England for blind people. Despite being shown little interest in it by a lot of teachers in schools for the blind, it still shone a new ray of culture for students in the Tokyo School for the Blind and the Deaf. Four years later in 1906, he published *Nichiei no Moujin* together with a Braille translation, which reorganized and expanded upon *Shin Eikoku*, and was distributed to schools for the blind all over Japan. At that time, there was a movement to improve the education of students with disabilities, and this book was widely accepted by the blind community in Japan. In addition, he was responsible for training blind people such as Kyotaro Nakamura and Tetsutaro Kumagai as the next generation of pioneers in services for the blind in Japan. It was for these reasons that Tadasu Yoshimoto was called the father of the blind in Japan.

Key words: Tadasu Yoshimoto, welfare services for the blind, *Shin Eikoku*, *Nichieino Moujin*, education of for the blind